
けしごむ

tanuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けしごむ

【Nコード】

N1935D

【作者名】

tanuki

【あらすじ】

「人生つてのはなあ、キラキラ輝いてる時と泥水をすすって生きるときがあるんだよ。そんときや楽しいだろう。そんときや苦しいだろう。いろんなこと、みんなひっくるめて、楽しい人生だ」「けしごむがいうなよ・・・」

はじめ

正直ないと思った。

なんでよりもよってこれなんだ・・・と。

世の中もつとステキでいいじゃないか！夢があつていいじゃないか！
普段はそんなことまったく考えない癖に、俺の脳裏にはそんな言葉
がぐるぐると回っていた。

「まあ、人生案外そんなもんだぜ？ラクにいこうや」

俺の顔のすぐ下あたりから声が聞こえてくる。いや、なんでそんな
立派なセリフを吐くんだよおまえ・・・。

俺は長いため息を吐きながら、大人なセリフを吐けるダンディーな
・・・けしこむを見つめていた。

激情

その日、ひのみ かずや日野美一也は朝っぱらから悩んでいた。

「どうした坊主、悩み事があるなら俺に相談しねえか」

こいつのせいだった。

目の前の机にポツンと置いてある、こいつのせいであつた。

「いいかあ？若いうちつてのは迷っちゃあ行けねえ。悩んじゃあいけねえんだ。そのときの感情にドンと身を任せて、あとは山となれ、川となれつてのが漢ってもんよ」

「・・・うるせえな、おまえだつて朝からあのカバーがいい、このカバーがいいとかいつてたじゃねえか」

一也のいつているカバーとは・・・、まあけしごむのカバーである。

「ふう、どうやら坊主の人の揚げ足を取る癖はまだ直っちゃあいねえようだな」

声質から実際のため息でも聞こえてきそうな感じた。

「なあ、おまえ頼むから絶対に教室で喋るなよ・・・。もしも喋ったら・・・!!」

「じくり・・・」

一也が急に普段見せない迫力を出すと、けしごむから息を呑む音が

聞こえる。なんともまあシユールな光景である。

「・・・おまえをクラスの頭ホワワワンな女子に貸して、恋のおまじないの道具にしてやる！！」

「お、おめえさんは鬼かい！？いくらなんでもそりゃあ・・・！！」

「そうなるのが嫌だったら喋らないことだな」

「ああ、そうかい！わかったよ！ったく・・・。」

本人はまったく遺憾のようだが一也にとっては大問題である。

なぜならこいつ・・・ダンけし（ダンディーなけしごむ）は見た目はまったく普通のけしごむなのである。それでも、声だけはする・・・という、まあよくわからない物体なのだが。

「よし、さっさと行っちまおう」

ダンけしが無言待機モードに入っただのを確認し、一也は口に朝食のトーストを詰め込んで家を飛び出た。

「おはようございます」

「おはよう」

秋の風が少し肌寒い中、ところどころで挨拶をしている。

学校では、クラスの委員長のポジションについている一也もたまたま追い抜いていく、自転車通学のクラスメイト達と律儀に挨拶を交わしていた。

「今の子・・・なかなか美味そうだったな」

すっかり大人な（ダンディー）発言をしてしまったダンけし。

ここからは2秒ほどのうちにあった出来事である。

一也は歩みを止め、脇に挟んでいたカバンを開け、筆記用具入れからけしごむ（ダンけし）を取り出し、前へ思いつきり投げる・・・！
近くを歩いていた同じ学校の生徒が怪訝そうな顔をしたが、んなもん構ってる暇はなかった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

思わず激情に身を任せて行動してしまった一也だったが、胸は満足間でいっぱいだった。

（ああ・・・、ダンけしがいつてたのはこういうことだったのかな・・・）

一也はとつさにとつて自分の行動を振り返って、あいつ、なかなかいいやつだったのかもな・・・と義務的に心の中でけしごむの遺影にチーンと鐘を鳴らして、手を合わせながらもそこまで後悔はせずに校舎の中に入って行った。

パサッ。

（なんだ？）

下駄箱を開けると、どこか中身の予想できる薄ピンク色の封筒が出てきた。

一也は、とりあえず辺りを見てからカバンに突っ込んでおいた。

「おはよう」

クラスに入ると、すでに登校していたクラスメイトらが揃って一也の方を見てホッと安堵の溜息を尽いた。

「どうしたんだ？」

クラスメイトの少し異様な反応を気にしつつ、席に近づいてみると・
・自分の席のすぐ隣の窓ガラスが割れていた。
そして、机の上には・・・

「いや、日野美！おまえがもう少し早く登校してたらやばかったぜー！！」

「ほんと、ほんと。多分登校中の小学生とかのイタズラだと思うけど、日野美君が無事でよかった」

「ったく、誰だよ。今時けしごむなんて投げて遊んでるやつは」

「恐らく、頭の回転が悪く、感情に身を任せてしまう坊主なんだろうな」

ちなみに最後のセリフは、一也の机の上にガラスの破片と乗ってるけしごむ（ダンけし）のものだったのだが、誰も気がついた様子はなかった。

「どうする？ガラスのことは勿論言っけど・・・、日野美君ももしかしたら危なかったって先生にいつとく？もしも次もあつたら・・・

」

とても優しいクラスメイトたち・・・、ありがとう、本当にありがとう。でもいいよ、だってそれ投げたの俺だし・・・。と一也は心の中で感謝の涙を流しながら、大丈夫たまたまだよといって笑いながら、心配するクラスメイトたちを宥めておいた。

クラスメイトたちとガラスの破片を掃除したあと、そろそろ教師が来るかなと落ち着きはじめたクラスでダンけしがぼそつといった。

「坊主・・・、もし俺が飛んでこの席に不時着したっていったら信じるか？」

「まじっ!？」

「嘘だけどな・・・」

一也はまた激情に身を任せて、頭を少しちぎっておいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1935d/>

けしごむ

2010年10月28日06時56分発行